
Episode.0 ~ その物語は語られず…それでも誰もが知っている

Kei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Episode・〇～その物語は語られず…それでも誰もが知っている

【ZINEコード】

Z06450

【あらすじ】

10月1日…それは命日であり、英雄が旅立つた日である。たった1人の男しか知らない物語、そして誰もが知っている英雄の物語…。 FF7のザックス追悼小説です！！

(前書き)

10月1日はザックスの命日（と思われる…）といつじとで、私と
私のお友達で勝手に企画したザックスの命日を弔う“Episode
e・o企画”の小説です！！あくまでもザックスの追悼小説なので、
ザックスに深くかかわった人間…つまりCC・FFFVIIのキャラ
クターのみしか登場していません！！（しかもCCでも特にザック
スと深く関わった人間しかでていません）時間軸的にはACC後で
すが、お話的にはCCCの話です！！

天候は晴れ。

同じ10月1日なのに…あの日とは違い、眩しいほどの光が辺りを照らしていた。

今日、10月1日は…ある男が星へ還った日。

だから…

今日といつ日を弔おう…。

Episode · 0

最初に訪れたのは、真っ黒なスーツに袖を通した黒髪の男だった。

「…久しぶり、だな…」

少し前まではそこに形見の剣が突き立てられていたのだが…それは今ではそこには無い。だがまるでそこに眠る者を弔つように…綺麗な花が咲き乱れていた。

「お前が星へ還つて…ここに来るのはこれで二度目だ…」

初めて訪れたのは、ここに眠る男が死んだその日。報告を受けて駆けつけた時には既に…全てが終わったあとだった。

「私は逃げていたのかもしない。お前を救えなかつた非力な己自身から…」

自嘲氣味に口元を歪ませる。だが空を見上げれば…そこには広がるのは、あの田とは違つ青年。

「…だが、いつも今日ここに来ることができたのは…」

少し前に見た、強い背中。それはとても弱く脆く…いつ崩れ落ちてもおかしくは無かつたはずなのに…力強く今を生きることを決めた、かつての宿敵だつた男の背中。

その背中と…ここに眠る男の背中が重なつたのだ。

「クラウドのおかげ…なのかもしないな…」

フツと笑みをこぼしながら、男は煙草に火をつける。そしてそつと、地面にそれを置いた。

「我々神羅の人間は…相変わらず汚い仕事に手を染めている。いや…おそらく、これからもそうやって生きていくのだろう。ターグスに身を置く以上…それは覚悟の上だ。」

ゆらゆらと揺れる紫煙を見つめながら…

「それでも、少しでもこの星に償いが出来るならば…私は喜んで身を委ねる。だから…お前はエアリストと共に見守つていってくれ。この

世界の歩みを……。」

穏やかな笑みを零し、ターカス主任のソーンは……その場を後にした。

* * * * *

次に訪れたのは、白いワンピースに身を包んだ茶髪の女性だった。

「また来たわよ？今日は綺麗に晴れたわね……。雨だったら貴方を怒鳴つづけていたところよ」

ふと視線を落とせば、そこには燃え尽きた煙草の吸殻。その銘柄は……かつての同僚で、そして上司だった男が吸っていたものと同じ……。

「フフッ、ソーンに先を越されちゃったみたいね」

「どこか楽しそうに笑いながら……しかしその表情は、次第に哀しい笑みへと姿を変える。

「貴方がこの星を去つてから……沢山の出来事がこの星を襲つたわ。私は殉職扱いになつて、この星は傷付いて、それでも立ち上がりつて……」

何度も何度もこの星は傷付き、それでもなお立ち上がりつて輝き続けている。

「その度にね、貴方を思い出すの。不思議よね……どんなに不安でも貴方のことを思い出すと、大丈夫のような気がしてきて……」

「ここに眠る男が託したソードを振るうクラウドの姿が脳裏を過ぎる。

「クラウドがあの剣を振るつている姿を見ると、貴方が剣を振るつて戦つているかのように見えてしまつ……」

そして、かつて彼がその剣を手にして戦つていた時の姿が脳裏を過ぎた。

「本当に、彼は貴方の遺志を受け継いだのね……」

あの巨大なソーダと共に……。

「今はもう使えなくなつてしまつたかもしだれなけれど……貴方の想いはいつだって、クラウドと一緒に……。そうよね？」

例えどんなに離れていても、形としてクラウドのそばに無くても……。それでもきっと、いつだってそばで見守つている。ここに眠る男は……そういう男なのだ。

「本当はね……私、貴方のこと……好きだった。それが恋愛感情なのか何なのかは良く分からない。けど……私は貴方という人が好きだったわ。そして……今でも好きよ？」

その微笑みはとても穏やかで、かつて激戦を潜り抜けてきた者とは思えないような姿。

「ありがとう……貴方に出会えて、貴方と触れ合えて……私は幸せだつ

た…

そつと彼女は、花を添える。彼を弔う白い花を…。

「また来るわね？今度は他の殉職メンバーも一緒に…」

風になびく髪を押さえながら、かつての戦友だったシスネは広がる青空を見上げていた。

「ああ…貴方の色ね…」

懐かしそうに微笑みながら…。

* * * *

昼を過ぎた頃に訪れたのは…軍服に身を包んだ2人の男だった。

「よつ…今日は無理言つて仕事休んで来てやつたぞ…！」

「本当は重要な任務があつたんですよ？それなのに本当にリーブ局長に無理を言つて…」

けど…と、片方の男は足元に視線を落とす。

「もう先客がいるみたいだな。まあ、昼も過ぎてるし…当然と言つたら当然か…」

苦笑しながら腰を落とし、咲き乱れる花の中心をジッと見つめた。

「お前の殉職通知が来たとき…本当は信じたくなかつた。絶対に生きてるつて…ずっと思つてた。」

「最後まで信じていませんでしたからね…」

「当たり前だろ…!…だって…俺達は友達だつたんだから…」

悲しい出来事だからこそ、絶対に信じたくなかった。ましてや死体も上がつていないので信じるという方が無理だつた。

「サンブルが神羅屋敷から逃亡したつて聞いた時も嬉しそうにしてましたしね」

「ああ、俺には分かつたんだ。絶対にコイツだつて…。けど結局、俺には何も出来なかつた。そしてお前は…」

田を閉じれば蘇るあの田の光景。

周りの惨状にも驚いたが…

友の変わり果てた姿に絶望した。

「あんなに六だらけになつてたのに…幸せそうに笑つてさ…」

「本当に驚きましたよ。そして、貴方らしいとも思つました…」

だがその表情を見て、納得したのだ。

彼はこの世に未練なく旅立つて逝つたのだと。

「お前、エッサイとセバスチャンが死んだ時…すごく落ち込んでただろ? お前が死んだ時もさ…沢山のソルジャー達が泣いたんだぞ?」

「貴方はそれほどまでに、沢山の人に慕われていたんですね。……そ

んな貴方を、僕は出世のために利用しようとしたんですね。」

「さすがにそれを聞いた時はコイツのこと、ぶん殴ったけどな

「あれは痛かつたですよ…」

「当たり前だ…マジでブチ切れたんだから…」

ここに眠る男の死がきっかけで、沢山の者が涙を流した。己の愚かさを痛感した者もいた。

そして…

「今でも後悔してる…。何かお前のために出来なかつたのかな、つて…」

「僕もですよ。純粹に…貴方の力になりたかった…」

ずっと、恨んでいた。自分の地位も名誉も捨ててでも彼を救おうとしなかつた自分自身の非力を。

「けど…知ってるんだぜ？お前はそういうことを言つて謝つても、笑い飛ばして気にするなつて言つことぢり…」

「貴方はそういう人でしたから」

だがそれでも、こうしてこの場所に訪れたのは…

「すまなかつた」

「そして、ありがと「ひざいました」

謝罪とお礼が言いたかつたから。

あの日救えなかつたことに対する謝罪と、あの日まで沢山の笑顔と

元気を与えてくれたことに対するお礼。

「まだまだ俺達はやることが山のように残ってる、世界復興だ…」
「けど、必ずやり遂げてみせます！！貴方の遺志を継ぐ、彼と共に…！」

そして決意を表すために。

「だから見守つてくれよな…！」

「お願いしますね？」

そつと2人はかつて自分達が使っていたソードを置く。

「お前と共に戦つてきた剣だ」

「今、僕達が持つべきは剣ではなく…人々の手。もつ僕達には不要なものです。」

「だからさ、お前が預かってくれよ…。俺達が共に過ごした時間と一緒に…」

「お願いしますね？」

やがて2人の携帯が鳴る。仕事の電話だと顔をしかめながら、慌しく去つていった。去り際に…

「また来るな…！」

「今度はちゃんとした供え物、持つてきますね…！」

振り返り、元ソルジャーで現在はW.R.O隊員のカンセル、そしてルクシーレは笑つた。

かつて彼と共に過ごした時間で見せていた時と同じような笑顔で…。

* * * * *

田も暮れそうな頃に…バツの悪そうな表情でその男はやつてきた。今までの来訪者と同じその場所に…。

「遅くなつて」めん…

来るなり謝り、その場所に座り込む。日に映つたのは、彼の眠る場所に供えられている様々なもの。その様子から、既に沢山の人物が彼の元に訪れたのだということを悟つた。

「もしかして俺が最後か…？」

“ああ、そうだよ…何でこんなに遅くなつたんだよ…待ちくたびれたぞ…!”

そんな声が聞こえてきそうな気がする。そしてその姿が安易に予想できて…思わず笑みがこぼれた。

「すまない、仕事が立て込んでたんだ。運送屋から何でも屋に転職して…毎日死ぬほど忙しいんだ。けど…約束、だつたからな…」

「そつだらへ」と問えば、まるで肯定するかのようにサッパリと心地よい風が彼を撫でた。

「毎日忙しくて、ホント大変だけ…。アンタが言つてた通り…何でもやつてる。面倒なこと、危険なこと…報酬次第で何でも引き受ける。辛いって思つ」もあるけど…」

スッと畠を細めて空を見上げた。

「生きてる、って……実感できる…」

空はもう茜色に染まり、今日とこいつ畠に別れを告げようとしている。

「アンタのおかげ…だな…」

この場所に来ればいつだって思い出すのはあの瞬間。ここに眠る男の最期の瞬間。彼だけしか知らない…真実。

一人で抱える過去に苦悩し、押しつぶされそうになつたこともあつた。一度は自分の人生そのものを諦めたこともあつた。だが…その度に手を差し伸べてくれたのは、他の誰でもない…彼だった。

「ホント…アンタはお人好し過ぎるよ…」

しかし、そんな彼だからこそ…皆が慕い、いつもして彼を想んでいるのだ。

その笑顔が温かかった。

その背中がとても頼もしかつた。

その腕が…自分を最後まで守つてくれたその腕が…優しかつた。

「けど、アンタは…まだ生きてる…」

そう言いながら、彼は大きな持ち物を掲げる。包んでいた布を取り
払えば、それは…

「バスター・ソード…アンタの、夢と誇りの象徴…。そして、アン
タが生きていた証…」

彼が生前に使用していた武器・バスター・ソード。

それは人から人へ渡り…最終的に、ここに眠る男から彼へと手渡さ
れた。大切な想いと共に…。

「最初は凄く重かった。それこそ…いろんな想いに押しつぶされて
しまいそうなほどに。けど…全てを思い出して、この剣を振るつて
いるうちに…誇りに思えたんだ。」

まるで…一緒に戦っているかのような感覚…。

「そして、この剣を手にして思った。」

それは彼が最後に言つた言葉…。

“お前が俺の、生きた証…！！”

「俺が生きていれば…アンタも生き続けることが出来るんだよな…
？」

例えもう、彼がこの世にいなくても。」のバスター・ソードが使えないくなってしまっても。別の武器を手にして戦うことになつても。

受け継いだ夢と誇りだけは、失われることなく、輝き続けている。それは、彼が…彼の想いが…生きている証だ。

「これから先、どんなことが起きても…俺は戦う。アンタと一緒に…」

そっと空に手をかざせば、僅かな温もりを感じた。

「…………まさか…まるでそこに居るみたいだな…」

その手はただ空を切つただけだったが、確かに…

「…掴んだよ…アンタの手…」

その手を掴んだ。

「誰もアンタの最期は知らない。俺しか…知らない。けれど、それでいいと思った。あんな悲しい思いをするのは俺だけで十分だ…」

もう誰も悲しむ姿は見たくない。

例えそれがかつての敵であつたとしても。

だから…

「今日と同じ、あの日の出来事は…俺とアンタだけの秘密だ…」

悲しい思い出は胸にしまい、今を生きると決めたのだ。それはもう…随分前に決めたこと。だが不思議と、重荷に感じることは一度も無かつた。

「俺が生きている証で、アンタが生きていた証…だからかな…？」

彼の問いかねるよつて…きりつと一番屋が空に輝く。

「生きるよ…アンタの分まで…。俺は生きる…」

この命はきっと、ジエノバ細胞の影響でかなり延命されたことだろう。どれほどの時間生き続けるかは分からない。だが、命続く限り…

「生きるよ…一緒に…」

掲げたバスター・ソードに、彼の最期を知る唯一の人物…クラウド・ストライフは誓いを立てた。

「だから、見守っていてくれ…」

日は落ち、辺りを支配するのは闇。だが不思議と、冷たさは感じなかつた。

感じるのは温もり。

「やつぱり暖かいよ…アンタのそばつて…」

ふわりと笑いながら、クラウドは立ち上がる。バスター・ソードを片

手に、クラウドはその場を後にした。

最後に振り向かれる…

「また、来年も来るよ…ザックス…」

来年、この場所で会う約束を交わして…。

「お前と共に任務が出来たことを、私は誇りに思つ…。ありがとう、ザックス…」

「貴方に出来て本当に楽しかったわ。大好きよ、ザックス」

「一緒に馬鹿やつて、ミシショソになして、飯食つて…そんな些細なことがホント、すべく楽しかった。ありがとな、ザックス…！」

「僕は貴方にソルジャーの生き様を教えてもらつたと思つています。今の僕がこうしていられるのも、貴方のおかげです。本当にありがとうございました…ザックスさん……」

「今度…」や、絶対にアンタのこと…忘れない。だから…見守つてくれ…ザックス…」

10月1日のある日…沢山の者が涙を流した。

一人の男のために。

その男の名は、ザックス・フェア。

誰も知らない彼の最期。その最期を知るのはたった一人の男だけ。
しかしそれは語られること無く…いまだに謎のまま。
だが、誰もが知っている。

この場所から…“英雄”が旅立つたといふことを…。

ザックスといふ名の英雄が…。

彼を知る全ての者達は…知っている…。

【その物語は語られず…それでも誰もが知っている

E nd】

(後書き)

といふ訳で、ザックス追悼小説でした！！みんながザックスのお墓参りをするという話です！！スター・ソードがその場所に内のは、ACCのエンディングで教会に刺さっていたのを見たので…そちらのエンディングの方を使いました！！そこにクラウドが剣を持つてくるといふシチュエーションを書きたかつたんです！！

しかしこうして書いてて思つたんですけど…ホントに、ザックスがあの丘で死んだことはみんなが知つていて、ザックスの最期を知つているのはクラウドだけなんだよな…つて…なんかしみじみしましたね…！！だから、この小説のタイトルの“その物語は語られず”は、クラウドは誰にもザックスの最期を話していないから誰も知らないんだよ、という意味なんです！！けどザックスという男が最期まで何か大切なモノ（クラウド）を守つて星へ帰つたことはみんなが知つていて…。そこからザックスという英雄が旅立つたことはみんなが知つていて…だから“それでも誰もが知つていて”といつ風になつたんですね（笑）ややこしいタイトルですが、こういう意味があつたのです！！つて…読んだら分かりますよね（笑）

キヤラの誕生日の場合は盛大に祝えばいいけど、命日となると…盛り上がるに盛り上がりがれず…（苦笑）けど小説まで暗い話にはしたくなかったので、みんな前向きでザックスの分まで生きるぞ…！…という話にして…ザックスの命日を偲びます…！…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0645o/>

Episode.0～その物語は語られず…それでも誰もが知っている

2010年10月28日00時56分発行